



15周年記念号



2018・8・9

SORA 80号

三十句

柴田佐知子

西国や青みし麦の上に灘

久方の光の端に白子干す

ぶつかれる黒潮に反る青岬

戦場へ向かふ缶詰大南風

次の世が少し見えたる箱眼鏡

放牧の大地のうねり夏薊

荒くれの牛より立ちし雲の峰

熊蟬の裏も表も見て放つ

鬼となる力はあらず櫃の花

夏落葉蔵のまはりはやや湿り

風鈴や苾まで眠る赤ん坊

毎食を正しく父の藺座蒲団

—「俳句」六月号より—

右指せばみな右を向く春の山

幾たびも鳥が巣箱を下見せり

水桶の中も明るき仏生会

猫の舌ざらりと八十八夜かな

黒髪頃は短し春の月

更けて漕ぐふらここの背を鬼が押す

諦めてしまへば自在リラの花

葉桜や一滴を待つ試験管

地獄絵にうすれし亡者走り梅雨

青年にたてがみ与へたき夏野

—「俳壇」六月号より—

遠足の縦列数歩にて歪む

弁当の上は青空野に遊ぶ

余生など無し永き日を使ひきる

船霊の夜は出て遊ぶ春満月

寝ころべば昼は海よ蟬しぐれ

—「俳句界」六月号より—

家深く母の老いゆく蟬しぐれ

秘すことのうすれてゆきし白上布

耳遠き母と見てゐる白雨かな

福岡 高倉 和子

思ひ切り鳴きて雲雀の落ちにけり

霾や小石で囲む島の墓

鯉幟はちきれさうな空のあり

脱稿の机の上の新茶かな

青蛙喜ぶやうに跳びにけり

捨てられぬものなどなくて曹達水

これ以上伸びぬ刀や飾り山笠

時間割無き休日の麦酒かな

東京 中田みなみ

夏来たる乳房巨きな牛が鳴き

牛去りし跡散乱と小判草

緑蔭の微笑は電波母国訊く

歓声に青き芝生の浮き上り

緑蔭に解散空へ一目散

まくなぎと路地を出て来し検針員

蚕豆のお披露目どれも三兄弟

それぞれの部屋を出されしはじき豆

福岡 柴川志津子

熊崎 荒井千佐代

握手して東西に去る卒業子

蝶の昼浜の恵比寿に酒供へ

鶏がほつほつ突く若葉かな

岬さびれ藜ばかりが殖えぬたる

身を固く怪談を聞く日焼の子

入り交じる寝墓塔墓金鳳花

水無月や子に入院の荷を持たせ

聖苑にかじか小雨の安息日

病院にすべてを委ね夏蒲団

カステラセットを海霧深き峠茶屋

冷房の個室にひとり残されし

花桐に逢へず雨中を折り返す

兄倒れる

病室の白く暮れゆく走り梅雨

泰山木鏝ぶや危篤の知らせ受く

秋澄むや久しく聞かぬ労働歌

黒南風や意識戻らぬまま十日

埼玉 服部 早苗

息つめて視る涅槃図の摩耶夫人

草餅や伊勢屋の紺の包装紙

兄上より訃報の手紙花の雨

ごつごつと鳥居の脚や大干潟

フォンダンシヨコラふふむ少女や蝶の昼

惜春や細き枝もて貝つつく

護符受くるごとくカーネーションの赤

仙台虫喰ひとり居なれば窓開けて

福岡 岸 洋子

桃の花母と筆談せしことも

夜は竿に巻きつけられし鯉幟

初鯉船の形の料理店

籠の目に挟まれ海鼠もう伸びず

回廊に雨の降り込む牡丹かな

緑の夜不意に蛇口が水こぼす

何事もなき母の日の暮れにけり

亀鳴くと造り酒屋の鬼子母神

北九州 深川 淑枝

広島 戸栗 末廣

雨に咲きけふる櫓や平家谷

たんぽぽの絮吹く英語教師かな

河鹿鳴く山河落人悲話をもつ

逝きし人残れる人や花筵

神楽笛夜の底流れ岩魚酒

雲雀野にあの日の影が落ちてゐる

神楽の夜明け掃かれゐる夏落葉

牡丹や寺院の縁の小座布団

一族の墓花栗を天蓋に

草山の匂ひ八十八夜かな

杉の秀の己が花粉にけぶりたる

あごひげの伸びる早さや夕薄暑

音もなく松に雨降る夏茶碗

夏蝶や庭に向き合ふ椅子二つ

薄粥をすすするや遠き青葉木菟

夕凧のまつ只中の仁王の目

福岡 角野良生

両腕は翼春風の一輪車

初蝶に指紋をつけて放ちやる

子が跳んで春の小川となりにつけり

高々とシェフの帽子や初燕

生ひ立ちは竜宮ならむ桜鯛

これほどに子の居し村よ鯉幟

老僧の小さな欠伸あたたかし

蛇が出ていつもの道でなくなりぬ



福岡 永淵 恵子

刃物屋の刃文あをあを夏来る
麦笛に麦笛こたへ筑後かな
柿山の柿の摘花はまだ半ば
朝刊のなき日は淋しゆすらうめ
バス停も石州瓦夏つばめ

糸島 小林 朱夏

座蒲団を折りて故郷に昼寝せり
門提灯同じ家紋の漁師町
新盆や露地の一角改まる
仏壇に鬼灯のみが残りけり
参道は二人の幅や曼珠沙華

千葉 原 友子

嫁取りも婿取りも絶え栗の花
ごつごつの手の味したり草の餅
取り分けて皿に余白やみどりの夜
回復の傷口痒き芒種かな
遠泳の点のたしかに折り返す

粕屋 秋 千晴

愛用の野球帽ごと日焼せり
島の子のみんな真つ黒蓼の花
花みかん双子の服が干されゐる
捕虫網置き牛小屋へ草運ぶ
つま立ちてシートを干せば朝の虫

福岡 あさなが捷

川風に鱗散らして鯉幟

駆け込みて最終便で帰省せり

帰省子の他人行儀に上がり来る

百合の香や一点みつめ麗子像

呉服屋の狭き間口や夏の雨

大野城 森 田 明 成

サイズ一つおとし病後の更衣

知らざるも挨拶かはし溝浚へ

歌垣の山老鶯の声ばかり

梅雨らしくなりて落ち着く暮しかな

塵ひとつ蠅一匹も許さざる

北九州 横 田 敬 子

送る人送らるる人駅三月

祖父の牛売られたる日よれんげ草

切り株にまだ力あり百千鳥

種袋忘れぬ場所に置いておく

母にまだ握る力や春の月

粕屋 吉 田 葎

ほととぎす谷に腹這ふ登り窯

石楠花やとびとびに読む敗者の碑

傍線のおまたつきたる書を曝す

卓ごとに大きな葉缶夏期研修

その下の筋肉動くアロハシヤツ

福岡 山内 碧

伐りし木へかくも大きな鳥の巣よ
濡縁で見てゐる蝶が高みへと
水音の他は聞こえず青田道
水遊び甲羅干しして終りけり
不幸負ふ顔などすなと墓

北九州 河原 敬子

花吹雪祝福受けてゐるやうな
近づけば千の蝌蚪逃ぐ影連れて
カルストの丘の広さよ夏燕
天道虫の付く寄せ植糸を買ひにけり
どの間にも牡丹を活けて留守居かな

福岡 亀井 紀子

能管は鬼女の件や青葉の夜
街中を直角にゆく燕かな
田んぼへの水路いろいろ夏蛙
悪しきこと考えてゐる蜥蜴かな
黒梁に蛇の通ひ路ありにけり

須恵 苑 実 耶

サンダルを埃まみれに踊りをり
白桃の匂ひの満ちし夜の仏間
一頁読めば眠れるちちろ虫
秋冷や母の遺せる鍬あまた
家系図に赤子加はる鱚雲

長崎 仲里 奈央

嘘ひとつ躑躅に紛れ込ませたし
終はりしと言ひ聞かすまで竹の秋
下闇に入る喧騒に負くる前
手仕事を一旦止めて薫る風
母の日や嫌がられても抱き締むる

福岡 三井所美管子

じやがたらの花や大地は斜めなり
草餅や祖母ありし日の濃きが欲し
停車場は森の向かうや遠郭公
捨てきれぬ算盤一つ亀鳴けり
梅花藻は母体のごとしあめんぼう

京都 天谷 翔子

嚙や爪を磨いて眉描いて
三つ編みの子のはにかめる桃の花
アネモネの昼ふかぶかと眠る母
つくばひに青空うつる旧端午
青野に立つ君よ攫うてくれまいか

長崎 松尾 龍之介

永き日や羽毛つけたる一卵
藤波やゲートボールの堅き音
雨乞ひの呪文繰るなり枝蛙
上げ潮に葉桜の影浸りをり
あごだしは故郷の味竹の秋